

人はなぜ、

武器をもって闘うのか

小倉 清子

人は、どんな境遇に立たされたときに、武器をもって闘おうと思うのだろうか。ここ数年間、つねにわたしの頭を占めて離れない問いである。

今年八月、南アフリカ共和国で開かれた紛争解決に関連する小さな会議に出席した。すでに武装解除をして政党として政治の主流に入った勢力から、現在も反政府武装闘争を続けるグループまで、六つの武装紛争のケースに関する研究発表がなされ、元・現武装グループの代表を含めて、政治解決に関するさまざまな問題について話し合った。わたしはネパールの武装勢力であるマオイストこと、ネパール共産党毛沢東主義派のケースを発表したのだが、それぞれが異なる興味深かった。

民族独立のために武器をもったケースや、長年の民族差別から解放されるために武装闘争を開始したケース。都市部を基点にしたグループもあれば、ネパールのマオイストのように農村から都市部を包囲する戦略をとったグループもある。戦略や目的はそれぞれ異なるが、共通している点がひとつある。それは、どのグループも「武器をもつ以外に目的を達成することはできない」という信念が、武装闘争を始める基になっていることである。

一九九六年二月一三日に、マオイストは王制廃止と共和制の導入、そして平等社会の実現を求めて、

おぐら きよこ / 1957年栃木県生まれ。ジャーナリスト。東京大学農学部卒業。1993年からネパール在住。現在、トリバン大学社会学・文化人類学部修士課程に在学中。2001年からマオイストに関する取材・調査を続ける。ロルの歴史を書くこともライフワークとする。著書『王国を揺るがした60日』(垂記書房)は3カ国語で出版。『ネパール王制解体』(日本放送出版協会)など。

人民戦争とよばれる武装闘争を開始した。一九九〇年にネパールが民主化されてから六年、政党による政治の舵取りは決まらずにまわってはいなかったものの、人びとは政治の自由を謳歌しているように見えた。国王による長い直接統治の時代が続いたネパールの歴史のなかでもっとも自由な時代に、なぜ彼らは武装闘争を始めたのだろうか。この問いの答えを求めて、わたしはマオイストの本拠地であるロルパに通い続けている。

ネパールの典型的な山岳地帯にあるロルパの村々で会ったのは、自らの歴史さえ知らない国家による犠牲者たちだった。かつて外から来た支配者から身を守るために自らのことを捨て、アイデンティティである歴史を残すことさえ止めてしまった人たち。首都カトマンズから国を操る歴代の支配者から、一度も顧みられることのなかった人たち。それは貧困と社会差別という結果として残り、状況は民主化後も変わることなく、社会変革のためには「武装革命しか道はない」とするマオイストの支持者を増やす結果となった。

マオイストは「武装闘争の目的は達成した」と結論づけ、昨年一月、政府とのあいだで和平協定に調印した。現在、新生ネパール建設のための制憲議会選挙に向けて準備を進めている。彼らが武器をもった目的が正当化されるか否かは、これからの歴史が語ることになるだろう。



目次

DECEMBER 2007 12
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
人はなぜ、武器をもって闘うのか
小倉 清子

02 特集 **マンガ**

世界へ広がるジャパンクール
奥野 卓司
フィールドワークとマンガ描き
都留 泰作
マンガミュージアムって、何？
牧野 圭一
韓国にとっての新しい生き方
伊藤 亜人

日本製から「国産品」へ
チヨムナード・シティサン

07 イヌイトの楽しみの行方
大村 敬一

08 モノ・グラフ
鹿児島の竹の文化
一民博の収蔵庫が語るアジアとの繋がり
川野 和昭

09 地球ミュージアム紀行
エクスポラトリウム
—科学博物館のメッカ
久保 正敏

11 表紙モノ語り
展示マンガ
朝倉 敏夫

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
ロンドンで生き抜くトルコ人移民
宮澤 栄司

15 時論・新論・理想論
小学生、みんぱくを航海する
加藤 謙一

16 外国人として生きる
心を引き付けて離さない町
アグネシカ・マジエツツ

18 地球を集める
ポトラッチで
作って貰ったトーテムポール
大給 近達

20 生きもの博物館
大きな卵を復元する
池谷 和信

22 フィールドで考える
花嫁を「買う」
深田 淳太郎

24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記